

漂流民ゴンザによるコメニウスの翻訳

井ノ口 淳 三

On the Translation of the Works of J. A. Comenius by the Drifter Gonza

JUNZO INOKUCHI

Abstract

The point I want to make is that illustrations in *Orbis sensualium pictus* (*the Visible World by the Sences, 1658*) of Jan Amos Comenius (1592 ~ 1670) have the significance to learn both languages and things.

I have translated *Orbis pictus* into Japanese 1988. But it was first translated into Japanese 1739 by Gonza (1718 ~ 1739), who was a young Japanese drifter. He was born 1718 in Kagoshima-prefecture, where was the south district of Japan. His father was a sailor, and he got on board also 1728. Then he was only 11 years old. They sailed for Osaka. But the ship was drifted, and 7 months after it arrived at Kamchatka, where was the east side of Russia. Sailors were 17 men. But 15 men of them were killed. Gonza and Soza (1696 ~ 1736) were only survived. After living here and there in Russia, they were taken to Peterburg 1733. There they studied Russian from 1735. The next year they taught Japanese in the Russian Academy of Science. Their leader was Bogdanof (А. И. Богданов 1692 ~ 1766). He was the adviser of the librarian in the Russian Academy.

They wrote 6 works, namely *The Russian-Japanese Wordbook*, *The Introduction to Japanese Conversation*, *The New Slavic-Japanese Dictionary*, *The Little Grammar of Japanese*, *The Model of Conversation* and *Orbis pictus*. Two of them were translations of Comenius. They used *Orbis pictus* as the textbook in the school. 1739 Bogdanof translated it into Russian from Latin, and Gonza translated it into Japanese from Russian of Bogdanof. Similarly they have translated *The Introduction to Japanese Conversation* already 1736. It was originally *Januae lingvarum rese-rata vestibulum* of Comenius. These were the first versions in Russian and in Ja-

panese. But Dr. Kurt Pilz did not include the first Japanese *Orbis pictus* in his list, and the first Russian also.

Dr. Klaus Schller referred to these books. And Dr. Gerhard Michel made mention of books also. How they knew the fact that the first Japanese translation of Comenius was made in 18th century? Though Japanese educationalists did not know it. I guess that Dr. Shichiro Murayama (1908 ~ 1995) told it them. The first scholar to give much attention to *Orbis pictus* by Gonza was Dr. Murayama. He was a Japanese philologist, and he was a visiting professor at Ruhr university in Bochum from 1965 to 1966. In those days Dr. Schller and Dr. Michel were also professor at that university. There was a possibility of the meeting among them. Dr. Michel quoted from the book written by Dr. Murayama, *Hyoryumin no Gengo*, which meant the language of the drifters. This book was the best to study about them. In this book Dr. Murayama translated *The Introduction to Japanese Conversation* written by Gonza into modern Japanese and commented on it.

But Dr. Schller and Dr. Michel did not make mention of the name of Gonza. They said about only Bogdanof. A dozen or so years later Dr. Michel referred to Gonza for the first time. Then he quoted from a monograph of Prof. Reiko Sato written in Germany. She indicated that some books written by Dr. Murayama were possessed in Ruhr university.

When I compare *The Introduction to Japanese Conversation* written by Gonza with the original *Januae lingvarum reserata vestibulum* of Comenius, I find that there are many differences between the two. For example the latter have 427 articles, but the former have 619 articles. The differences were caused not by Gonza, but by Bogdanof. Bogdanof divided one sentence of Comenius into two or three, and changed the content. For further details on this, see the Appendix.

But When I compare *Orbis sensualium pictus* written by Gonza with the original of Comenius, there is no difference between the two. I think that it is by reason of many illustrations in *Orbis pictus*. When they translated it into Russian and Japanese, many illustrations were helpful. I say this from my own experience. Gonza was not able to write Japanese exactly. He did not know the Japanese words and things also. Because he could not study in the Japanese school. But he could read Russian books and translate them into Japanese. He learned both languages and things through many illustrations in *Orbis pictus*, which was Russian version. For example Gonza translated “the beekeeping” into “the house of bee”. I think that he translated to look at the picture of the beehive. In this point we should recognize the significance of illustrations in *Orbis pictus*.

Key words : Comenius, Gonza, Bogdanof, *Orbis pictus*, *Januae lingvarum reserata vestibulum*

1. ゴンザとコメニウス

日本においてコメニウス (Comenius, チェコ語名 Jan Amos Komenský 1592～1670) の名前が知られるようになったのは、明治時代以降のことであり、しかもそれはもっぱら教育関係者に限られていた。¹⁾

しかし、18世紀に薩摩からロシアへたどり着いた漂流民ゴンザ (権左衛門もしくは権蔵と推察されている 1718～1739) が、すでにコメニウスの著作の翻訳をしていたことが知られている。²⁾ その全容はいまだ明らかではないが、以下に見るように近年ゴンザ関係の研究は急速に発展している。その進展によってはコメニウス研究にとっても新たな展開につながる可能性がある。そこで小論では、ゴンザの翻訳したコメニウスの著作の検討を通して、それらの著作の内容と特徴がゴンザの生活や活動にとってどのような意義を持っていたのかについて考察するものである。はじめにゴンザ研究の到達点を簡単に振り返り、ゴンザがコメニウスの著作とかかわりを持つようになったいきさつをたどることとする。

ゴンザ研究の歴史において「村山以前の時代」「村山時代」「村山以後の時代」という区分がなされるように、言語学者村山七郎 (1908～1995) による一連の研究は、文字通り画期的なものである。網屋喜行によれば、日本における諸文献の中にゴンザに関する記述が登場するのは、1884 (明治17) 年の外務省記録局編修『外交志稿』が最初である。これを含めて明治期に3点、大正期に4点、そして昭和中期の1955年までに14点と、あわせて21点の研究が発表されていた。しかし、「村山以前」の研究の多くは、「漂流史」とか「外交関係史」といった枠内でゴンザに言及するというものであった。³⁾

村山七郎はこうした先行研究にはまったく依拠することなく、独自の考察に基づき1963年の日本人類学会において「ソ連に保存されている二三〇年前の薩摩方言資料」と題する報告を行った。以後「村山時代」は、1994年まで約30年余り続くのである。⁴⁾ この間村山は、ロシアで発表された文献を主な手がかりにしてゴンザの生涯と業績を明らかにした。それによればゴンザの生涯は以下のように要約される。⁵⁾

1728年11月に薩摩から17名がワカシワマル (若潮丸?, 別名フェヤイキマル速行丸?) に乗り大阪に向かって出帆した。ゴンザの父は船の舵手で、見習いのため11歳のゴンザを連れていた。途中暴風雨のため1729年6月にカムチャツカに漂着した。しかし15名が殺害され、ゴンザとソウザ (惣左衛門もしくは宗蔵と推察されている 1696～1736) の2名だけがかろうじて助かった。2人は1733年にペテルブルグに送られ、ロシア正教の洗礼を受けた。ゴンザの洗礼名はダミアン・ポモルツェフ、ソウザはコシマ・シュリツであった。1736年からはロシア科学アカデミーに設置された日本語学校でロシア人に日本語を教えた。その指導者はロシア科学アカデミー図書館司書補のボグダーノフ (Богданов, А. И. 1692～1766) であった。ゴンザはボグ

ダーノフの指導を受けて次の6点の著作を作成した。すなわち①『項目別露日単語集』(1736年)、②『日本語会話入門』(1736年)、③『簡略日本文法』(1738年)、④『新スラヴ・日本語辞典』(1738年)、⑤『友好会話手本集』(1739年)、⑥『オルビス・ピクトゥス』(1739年)である。

村山は、これらの著作の中で『項目別露日単語集』をアルファベット順に編集して翻訳・翻刻し、『日本語会話入門』の翻訳とあわせて『漂流民の言語』に収めた。また、『簡略日本文法』と『新スラヴ・日本語辞典』についても同様の作業を行った。さらに村山は、ペテルブルグ生まれのドイツ系ロシア人アッシュ(Georg Thomas von Asch 1729～1807)が、ドイツのゲッチンゲン大学に寄贈した『項目別露日単語集』、『日本語会話入門』および『新スラヴ日本語辞典』の転写本(以下アッシュ本と略称する)をマイクロフィルムの形で入手し、科学アカデミー所蔵のマイクロフィルム(以下アカデミー本と略称する)との比較検討を重ねたのである。

このようにゴンザ研究史における村山の位置はきわめて大きいものであるが、彼は1995年に86歳で急逝した。しかし、1985年に村山の講演でゴンザのことを知った吉村治道が、その後10年間にわたりロシアの大統領に手紙で繰り返し訴え続け、ついに1994年に私費を投じて科学アカデミー本のマイクロフィルム6点をすべて入手し、鹿児島県立図書館に寄贈した。かつて村山は『簡略日本文法』と『オルビス・ピクトゥス』のマイクロフィルムを供与されなかったため、前者を手で書き写していたのであるから、これは大変貴重である。そして同年11月には吉村を会長としてゴンザファンクラブが結成され、ゴンザ研究は「村山以後」の時代に移行していくのである。⁸⁾

さてここでゴンザの生涯をコメニウスのそれと比較してみると、偶然ではあるが幾つかの共通点が見られる。第1に、幼くして親と別離したことである。第2に、嵐で船が難破した体験を持つことである。後に紹介するように、ゴンザはコメニウスの『世界図絵』を読み、翻訳までしたのであるが、その中の「第90章 難破」の章に関する記述には身につまされる思いをしたのではないだろうか。そして第3に、2人はいずれも人生の半ばで出国した後、生涯故郷に帰還することができなかったことである。なお研究史の上では、両名とも生誕の地が未確定であるという共通点がある。候補地は推定されるものの、決定的な論証はまだなされていない。また、これも偶然のことだが、コメニウスの生まれたちょうど100年後にゴンザの師であるボグダーノフが生まれていたことになる。

2. ドイツのコメニウス研究者によるゴンザへの言及

第1節で触れたゴンザの作成による6点の著作の中で、『日本語会話入門』と『オルビス・ピクトゥス』の2点は、コメニウスの著作の翻訳である。そのことは、村山によってすでに明らかにされている。⁹⁾

ゴンザがコメニウスの著作を翻訳した事実は、日本の教育学研究者や教育関係者にはほとんど知られていないけれども、ドイツの2人のコメニウス研究者がそれぞれの著作の中で紹介している。その1人は「コメニウス研究の第一人者」と評価されるクラウス・シャラー (Klaus Schller) で、彼は次のように記している。すなわち、「コメンスキーの教科書とその方法は、新しい (jungen) 科学アカデミーに基礎づけられた学校においても役立てられた。私はここでロシアの日本語学校にのみ言及する。そこでは『開かれた言語の前庭』(Vestibulum) と『世界図絵』(Orbis pictus) の日本語への類のない翻訳がロシア語転写でなされたのである。この翻訳は一般にコメンスキーの著作の最初の日本語訳であったと主張することができる。それらは科学アカデミーの指示により、そして科学アカデミーの構成員 (der Mitglied) であるボグダーノフの指導の下に翻訳された¹⁰⁾」。

シャラーのこの著作は、それまでのコメニウス研究の到達点と今後の課題を明らかにすることを意図した内容のものである。そしてこの文章は、スロヴァキアのチューマが執筆した「ヤン・アモス・コメンスキーとロシアの学校」(A. A. Čuma: Jan Amos Komenskij i ruskaja škola, Bratislava, 1970) という文献を紹介する文脈の中で記されている。

もう1人は、当時ボッフム (Bochum) のルール (Ruhr) 大学においてシャラーの同僚であり後継者ともいうべき位置にあったゲルハルト・ミヒェル (Gerhard Michel) である。彼は、「18世紀においても鳴りやまなかったこの純正主義者 (Purist) の警告と嘆きにもかかわらず、『開かれた言語の扉』(Janua) と『世界図絵』(Orbis pictus) の全ヨーロッパへの広まりを止めることはできなかった。実際、日本においてさえ『世界図絵』は、1739年にすでに知られていた¹¹⁾」と記している。

この文章は、「言語教科書としての『世界図絵』」という項目の中に見られ、次のような注がつけられている。すなわち、「Murayama Shichiro (Hyoryumin no Gengo-Roshia no Hyoryumin no Hogengaku-tekikoken, Tokyo, 1966). 表題の内容は次のように翻訳される。難船した日本人の言語。ロシアの海岸への難船者による方言学上の貢献。この著作の29ページの記述によれば、日本の船の海難貨物の中に『世界図絵』が見つげ出された。それは、ボグダーノフという名前のロシア人によってラテン語から日本語へ翻訳されたものである。この書物には次の要素が認められた。すなわち、2ページの序文、4ページの絵入りのアルファベット、302ページに及ぶ151の章、最後に158ページ以上の小さな単語辞典である。(私のこの記述は、ボッフムのカンメル [R. Kammer] 博士の親切な翻訳のおかげである)」。

これらドイツの二つの著作にはゴンザの名前が見られず、ミヒェルの場合にはボグダーノフによって日本語へ翻訳されたと記している。このような誤解が生じた理由は、おそらく村山の著作の内容をミヒェルらに伝えたカンメルの日本語理解の不十分さによるものと推察される。

それではシャラーとミヒェルは、どのような機会に村山の研究を知ったのであろうか。カンメルの紹介によるものではないだろう。実は1965年から66年にかけて村山は、彼らの勤務してい

たルール大学の客員教授であった。村山自身も、1966年にルール大学でコメニウスのラテン語の原著を見て、それがゴンザの翻訳した原著であることを突き止めたいきさつを繰り返し述べている。ここに彼らの接点があったものと思われる。村山は、戦前には外務省の嘱託としてドイツに滞在した経歴を持っていたことにも示されるようにドイツ語は堪能であり、ゴンザに関する論文をドイツ語で書いたこともある。また、日本の漂流民に関してドイツ人の執筆した論文も若干ではあるが当時すでに発表されていた。しかし、シャラーとミヒェルの著作で言及されているのは、村山の『漂流民の言語』のみである。これらのことからドイツのコメニウス研究者が、18世紀におけるコメニウスの著作の日本語訳の存在を知ったのは村山自身からであろうと推察されるのである。

その後ミヒェルは、1990年にモスクワで開催された国際シンポジウム「J. A. コメンスキーの理念における人間—文化—社会」での講演原稿「17世紀と18世紀におけるコメニウスのメディア理論および教科書の受容と影響」の中で初めてゴンザに言及した。すなわち、「レニングラードのアジア諸民族研究所古文書部に、1冊の『世界図絵』が保存されている。それは、1739年にロシア人アンドレイ・ボグダーノフと日本人ゴンザ（ロシア名ダミアン・ポモルツェフ）によって、ラテン語からロシア語および日本語に翻訳されたものである。以前にこの2人はすでに1736年に『日本語会話入門』（Tür der japanischen Umgangssprache）を執筆していた。表題はどちらかと言えば同じ著者の別の教科書である『開かれた言語の扉』（Janua linguarum reserata）を示唆しているにもかかわらず、村山氏によれば、それはコメニウスの『前庭』（Vestibulum）を手本としているはずだということであった¹³⁾」。

ミヒェルの論文に記された注によれば、彼は佐藤令子がドイツ語で執筆した論文からこれらの事実を知ったようである。そして佐藤のこの論文には、村山の著作や論文がルール大学の東アジア研究所に所蔵されていることが注記されている。このことから先にも推察したように、村山がルール大学客員教授の頃に自身の著作を寄贈し、その一部をミヒェルはカンメルに翻訳してもらって読んだという経緯がうかがえるのである。

3. 『世界図絵』とゴンザの翻訳した『オルビス・ピクトゥス』

それでは、ゴンザの翻訳とはどのようなものであったのだろうか。これについてコメニウスの著作とボグダーノフのロシア語訳とを丹念に比較してその特徴を明らかにしたのは、上村忠昌¹⁵⁾である。上村は方言研究の見地からゴンザの遺した著作を18世紀前半の資料として貴重なものとみる。そして『オルビス・ピクトゥス』を例にしてゴンザの鹿児島方言への訳し方の特徴を次のように整理した。① 日本・日本語に対応するものが無くて、訳に苦心した例、② 多義のロシア語を一語で訳した例、③ 同綴異義である別語のロシア語を一つの日本語で訳した例、④ 同綴異義である別語のロシア語を他方の日本語で訳した例、⑤ 綴り字の見間違いによる誤訳の例、⑥

ロシア語の意味を説明して訳にした例，⑦ ロシア語をそのまま使った例，⑧ 訳文と語釈の日本語が違う例，⑨ 漢字の興味深い訓読例。これらの分類のそれぞれに該当する具体的な事例がいくつも紹介されており，この整理は納得できるものである。

一口に『世界図絵』との対比と言っても，ゴンザの翻訳はロシア語文の逐語訳であり，しかも手書きのキリル文字による18世紀の鹿児島方言で表記されている。それをマイクロフィルムのリーダーにかけて字体の癖を読み取る作業は容易なことではない。上村の研究は文字通りの労作である。鹿児島県立図書館の依頼を受けて『オルビス・ピクトゥス』と『友好会話手本集』の翻訳作業に携わった岡山大学の江口泰生（国語学）も，「膨大な量で，しかも読みにくい文字が多く，翻訳というより“¹⁶⁾解読”だった」と語っているが，この翻訳の完成後も上村の示した分類はゴンザの翻訳を理解する上で有力な指針となるであろう。

このような上村の綿密な研究に助けられて，ここではコメニウス研究の立場から二，三気のついた点を補足しておきたい。

上村論文の冒頭で鹿児島県立図書館の所蔵するマイクロフィルムの初稿本『オルビス・ピクトゥス』の概括的な紹介がなされている。その中で「表題表紙の次にアルファベット順に並び替えた章題の目次索引（151章分，4ページ）が，ロシア語だけで示されている」とある。かつて筆者の翻訳した『世界図絵』では断り書きもせず省略したのであるが，コメニウスの原著でも確かに章題をラテン語とドイツ語の各々のアルファベット順に配列した索引が巻末に付けられている。このアルファベット順の索引をそのまま日本語に翻訳しても索引としての意味を成さないと考えたのでこれを省略し，章題順の目次のみを訳出したのである。したがって，これはゴンザとボグダーノフの用いた版だけの特徴ではない。ただし，巻末にではなくて表紙の次にアルファベット順の索引がつけられたものは珍しい。なお，1685年発行の4カ国語版（ラテン語—ドイツ語—ハンガリー語—チェコ語）の巻末には詳細な用語索引が付けられている。

そして上村は「コメンスキーの原著の章立ては150章であるのに，ゴンザたちのものは一つ多い。それはボグダーノフが，原著の第107章の「地球(a)」（ヨーロッパ，アジア，アフリカ半球）と「地球(b)」（南北アメリカ半球）を，それぞれ第107章と第108章に別立てにしたためである」と注記している。これも『世界図絵』の数多い異版本の中には，この部分を二つの章に独立させているものも少なくないことを申し添える。

また，上村論文の最後の方には「訳文と語釈の日本語が違う例」があげられている。その中で「……各ページの体裁は，左端にロシア語本文があり，その右に日本語の訳文がある。さらにその右にロシア語本文の中からロシア語単語が抜き出され，それに対応して日本語訳が右端に付けられていて，小辞典風の単語集になっている。このロシア単語はボグダーノフが抽出したと思われる」と書かれている。

ゴンザの翻訳の仕方と同じように，本文の横にその章で用いられた単語を添えている形式の版もあるので，「ボグダーノフが抽出した」とは必ずしも言い切れない。コメニウスの生存中のも

のでは、1662年の版がその形式になっている。その後1720年の版も同様の形式であり、この版はその後何度も増刷されている。したがって「地球」の章の分割という特徴とあわせて、本文の横に単語を添えるという形式に注目することにより、ゴンザとボグダーノフの用いた版をある程度絞り込める可能性がある¹⁷⁾。もちろん「ボグダーノフが抽出した」単語を添えたという可能性も残されている。

クルト・ピルツ (Kurt Pilz) の研究によれば、ゴンザが翻訳した1739年までに『世界図絵』には92種類の異版本が出版されている。その中にロシア語訳は含まれていないので、ボグダーノフの訳が最も古いロシア語訳であることはほぼ間違いない。このこと一つをとっていてもボグダーノフの功績は大したものであり、コメニウス研究の立場からも再評価されてしかるべきである。ボグダーノフ訳を別にすれば、最初のロシア語訳は1768年にモスクワで出版された5カ国語版(ラテン語—ロシア語—ドイツ語—イタリア語—フランス語)であるとされている。ちなみにその後には、1773, 1775, 1787, 1788, 1805, 1808, 1817, 1841, 1843, 1847, 1855, 1883, 1941, 1957の各年にロシア語訳が出版されている¹⁸⁾。

さらに、上村論文では「執筆順としては当然、本文が先あって単語集が後であろう」と記されている。これはボグダーノフらが本文中にある単語のほとんどを抜き出していることから彼らが単語集を作成しようとしたのではないかと考えたことによる。ここで彼らの作成した6点の著作の役割をもう一度振り返ってみると、次のような特徴が認められる。

- | | | |
|---------------|---------|------------|
| ①『項目別露日単語集』 | (1736年) | 項目別単語集 |
| ②『日本語会話入門』 | (1736年) | 項目別会話本 |
| ③『簡略日本文法』 | (1738年) | 文法書 |
| ④『新スラヴ・日本語辞典』 | (1738年) | アルファベット順辞典 |
| ⑤『友好会話手本集』 | (1739年) | 項目別会話本 |
| ⑥『オルビス・ピクトゥス』 | (1739年) | 項目別学習事典 |

以上の6点には、文法書、会話本、単語集、辞典、事典などが含まれており、外国語を学習する際の基本的な書物が一通り揃えられたと見ることができよう。会話集が2種類あるのは、通訳を養成するために授業用のテキストを何種類も必要としたからであろう。辞典類には『新スラヴ・日本語辞典』がある。これは1万2千語のロシア語を見出し語として有するものであり、1736年から2年がかりで作成された充実した内容のものである。これとは別に単語集を作成する意図があったのか否かについては、彼らの抜き出した単語とコメニウスの原著に示された単語とを比較して検討することが必要であると思われる。なぜなら『世界図絵』の異版本の中で本文とは別に単語を抜き出しているのは、活用によって変化した形で使われている本文中の単語の原形を示すためであると考えられ、単語集作成の意図からではないと推察されるからである。しかしボグダーノフらが、本文の横に単語を抜き出している形式を見てそこから何らかの示唆を得た可能性も残されている。その場合には上村の指摘するように、「執筆順としては当然、本文が先

にあって単語集が後であろう」ということになる。

次に、「漢字の興味深い訓読例」について説明している所で、ゴンザが, полуостровъ (半島) をファンブンジマ (半分島) と訳していることについて、上村は「当時の薩摩で、『半島・岬』のことを『ファンブンジマ』という言い方をしていたとは思えない。これもゴンザ独特の漢語の文字面に引かれての訳であろう」と記している。しかし筆者は、ゴンザが полу (半分) と островъ (岬) をそのまま直訳して合わせたのではないかと単純に解釈している。同様に недоуздко (半分くつわ) の場合も, недо (不十分, 不足) と узда (くつわ) を合わせたのではなからうか。

上村は他にもいくつかの例をあげて、「ゴンザは日本の文字についても教授していたのである。いずれにしても、この訓読例はゴンザがある程度、漢字を読むことができ、意味も分かっていたことを示している」と記している。「ゴンザはラテン語もできたことが推定されます」との村山¹⁹⁾の見方も含めて、ゴンザの識字能力については今後なお慎重に研究していく必要がある。

4. 『開かれた言語の前庭』とゴンザの『日本語会話入門』

次に、ゴンザの作成した6点の著作の中で、コメニウスの著作の翻訳であることが明らかだとされるもう一つの作品、『日本語会話入門』について検討する。

この著作には少なくとも次の6種類が存在する。すなわち、① コメニウスのラテン語原著 (1633年)、② ボグダーノフによるロシア語訳、③ ゴンザによる日本語訳 (アカデミー本、1736年)、④ ゴンザによる日本語訳 (アッシュ本)、⑤ 村山七郎によるアッシュ本の翻字・翻訳 (1965年、前掲『漂流民の言語』所収)、⑥ 上村忠昌によるアカデミー本の修訂 (1997年) である。

この著作の表題は『開かれた言語の前庭』(Januae lingvarum reserata vestibulum, 以下『前庭』と略称する) である。村山が『ラテン語入門』(Januae latinitatis vestibulum) としているのは、原著では本文の前にそう書かれているためであろう。注目すべきは、ゴンザが表題を『トグチマエ ユコト ニフォンノ コトバ』と訳していることである。コメニウスは1631年に初級用の教科書として『開かれた言語の扉』を出版した。これは、ヨーロッパをはじめ多くの国の言葉に翻訳され評判となったが、子ども向きにしては難しいという批判もあった。そこでコメニウスはもっとわかりやすい教科書として『前庭』²⁰⁾を作成したのである。「扉」の前だから「前庭」となるのであり、ゴンザの「トグチマエ」という訳語は適切である。

『前庭』には藤田輝夫によるラテン語原著からの翻訳がある。それを参考にして上村忠昌によるアカデミー本の修訂と比較すると、両者の間にはかなりの相違がある。おそらくこれはボグダーノフによるロシア語訳の段階で生じたものであろう。大量の相違点があることからそれらは「誤訳」という類のものではなく、ボグダーノフに何か考えがあって意図的になされた変化であ

るように思われる。

たとえば原著では427の項目がゴンザ訳では619までである。つまり原著の一つの文章が二つ～四つの文章に分割されていることが多い。「数詞」の箇所では両者は比較的良好に対応しているが、「副詞」や「前置詞」の箇所では対応関係がわかりにくい。逆に原著の「天にいる者の行為」の箇所が、ゴンザ訳では省略されている項目もあるなど、一般に宗教に関する内容の翻訳に問題が感じられる。これらのことについては文末の一覧表を参照されたい。

村山が(ボグダーノフ訳の)「ロシア語の но сих мало совершенно достигают учению, は意味が明らかでない」としている402は、原著では「277. Verum de paulo infra」に相当し、藤田訳では「作法の劣る者は本当に稀です」とされている。ゴンザは「チット ナロタフタ ウェック ナラウコト」と訳しており、それを村山は「一寸・習うた人は・追いつく。習うこと?」と翻訳した。ゴンザの訳がコメニウスのラテン語原著と異なるばかりでなく、ボグダーノフのロシア語訳(学業に完全に到達する人は少ししかない)からも離れているので、村山に疑問が生じたのであろう。この1例からも翻刻・翻訳の苦労がうかがえる。

柴田武が『漂流民の言語』の書評を書いており、それがゴンザファンクラブの会報に転載されている²²⁾。柴田は、『日本語会話入門』のなかで、49. kofjù karè「胡椒辛い」とある(p.87)が、「胡椒」は「とうがらし」ではないだろうか。71. Kjúkunomedzráfka「嬉しい客」(p.88)は「客は珍しい」ではなかろうか」と記している。それらの箇所はコメニウスの原著では、「29. Sal salsum, piper acre, immaturam pomum acerbum vel austerum.」および「37. Amicitia jucunda, nuncium laetum.」に該当する。それを藤田は「塩は塩辛く、コショウは辛く、熟れていない果実は渋く、酸っぱい。」および「交友は快く、そのたよりは嬉しい。」とそれぞれ訳している。柴田の推測の根拠が示されていないのだが、鹿児島ではかつて「とうがらし」のことを「胡椒」と呼んでいたことからこのような疑問が生じたのであろう。しかし、この項目のゴンザの翻訳は適切である。

もちろんゴンザの翻訳が常に適切というわけではなく、ゴンザ訳の段階で変化した場合もある。たとえば、ゴンザの「127. ニワトイガ カラスムグデェ コユル」を村山はそのまま「鶏が燕麦で肥える」と翻訳しているが、アカデミー本でもアッシュ本でもロシア語では「цегухъ гусь 雄鶏とがちょう」と記されていることから、上村は「ニワトイガ」は、「ニワトイ」と「ガ」との2語ではないかと『修訂』の中で注記している。コメニウスの原著では「88. Мэндриは卵を生み、ガチョウはカラスムギで飼育されます」となっており、ボグダーノフのロシア語訳は適切である。もしゴンザが「ニワトイガ」を1語のつもりで書いているとすれば、ゴンザ訳の段階で変化したことになる。しかし、上村の指摘するように2語である場合には、村山の理解が不足していたことになる。

ここで村山の解釈に関して二つの例をあげておこう。村山は、「36. オナガ キエイカ」を「女子は綺麗」と現代語に訳している。その箇所は原文の「23. 雄孔雀は美しく、雄猿は醜い」

に対応する箇所である。ゴンザが「オナガ」を「女子」ではなく、「尾の長い鳥」の意味で用いた可能性はないだろうか。

さらに、ゴンザ訳の「210. チカラン ツヨカ フタ ナル タクセ モッチ」「211. ヨワカフ タ スクノ モチガナル」について、村山は「モチガナル（持ちがなる）」と注記し、「持つていくことができる」と訳している。原文では「129. 強健な者は多くの事柄に辛抱できますが、柔弱な者は少しも我慢できません。」とあるように、「辛抱する」という意味である。「モチガナル」とは、「荷物を持つ」という意味ではなくて、「耐える」「我慢する」という意味の「持ちこたえる」だという可能性もある。

以上の二つの点についてボグダーノフによるロシア語訳を検討したところ、いずれも村山の解釈の正しいことが確認できた。このようにコメニウスの原典との相違が生じた箇所については、ボグダーノフによるロシア語訳やゴンザによる薩摩弁訳などそれぞれの訳文を検討することによって、どの段階で相違が生じたのかを調べることが可能である。

この他コメニウスの原文とゴンザ訳とがまったく反対の意味になっている箇所も見られる。たとえば、原文の「256. 先生は教え、授業料を得ます。」という文章が、ゴンザの翻訳では「370. オソイェラル ナンヂャイ トラヂェナ（一切無料で教える）」となっている。つまり有料であったはずの授業料が無料に変化しているのである。このような箇所を分析することによってボグダーノフのロシア語訳の特徴を明らかにすることもできよう。

さてこれまで見てきたように、『世界図絵』に関しては、コメニウスの原文とゴンザ訳との間には章の順序や数などの大枠において大きな違いは見られない。上村も「ボグダーノフのロシア語訳は、コメニウスのラテン語から直接にきわめて正確に訳していると推察される。ゴンザの日本語訳は、ボグダーノフが与えたロシア語訳の忠実な逐語訳になっている²³⁾」と記している。しかし、ゴンザの『日本語会話入門』をコメニウスの『前庭』と比較してみるといろいろな点で相違がある。その理由は明らかではないが、『日本語会話入門』の方が先に翻訳されたためにボグダーノフがコメニウスの著作の内容をまだ十分に理解していなかったということも考えられる。また、『世界図絵』の原典には挿絵がついているので、文意の不明な箇所は挿絵を手がかりにして翻訳できたという有利な事情がある。幼くして日本を離れたために、日本語の読み書きも十分にできなかったはずのゴンザが、『世界図絵』のほとんど正確な翻訳をするまでになった背景には、やはり挿絵の持つ大きな役割について考えざるをえないのである。

これまでコメニウスの著作のゴンザによる翻訳を読むことはきわめて困難を伴う作業であったが、1962年頃に村山が『日本語会話入門』のマイクロフィルムをゲッチンゲン大学から入手し、その30年後の1992年に鹿児島県立図書館が村山の入手していた科学アカデミーのマイクロフィルムとあわせて複製し、一般に公開した。この年はくしくもコメニウス生誕400年にあたっていた。さらに1994年に吉村が『オルビス・ピクトゥス』を含むすべてのマイクロフィルムをロシアから購入し、鹿児島県立図書館に寄贈した。その後それらを上村が解読し、1998年には江

口の翻訳が完成した。これらの人々の努力によって今後さまざまな研究の進展が期待される。ところが著作権の関係から、せっきくの江口の翻訳も鹿児島県立図書館を直接訪ねなければ見ることができない。貸し出しはもちろんのこと写真撮影やコピーをとることも禁じられている。今後ロシア側と交渉して複写が可能となるように配慮を望むものである。

注

- 1) 井ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房, 1998年, 序章。初出は, 井ノ口淳三「日本におけるコメニウス研究の成果と課題」『追手門学院大学人間学部紀要』第5号, 1997年。
- 2) 同上書, 第9章参照。初出は, 井ノ口淳三『『世界図絵』の意義』, J. A. コメニウス『世界図絵』ミネルヴァ書房, 1988年。
- 3) 網屋喜行「村山七郎氏以前における薩摩漂流民ゴンザの研究」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』第24号, 1995年。
- 4) 網屋喜行「薩摩漂流民ゴンザと村山七郎氏の研究」『窓』95号, ナウカ, 1995年。
- 5) 村山七郎『漂流民の言語』吉川弘文館, 1965年, 28ページ以下の記述をさらに要約した。ゴンザの生涯と活動についての詳しい説明は, 以下の文献を参照されたい。田頭壽雄『漂流民・ゴンザ』春苑堂出版, 1998年。上村忠昌「教育学者ボグダーノフのテキスト作り」『鹿児島工業高等専門学校研究報告』33号, 1998年。
- 6) 村山七郎「権左(ボモルツェフ), ア・ボグダーノフ共著 簡略文法について」『文学研究』66, 九州大学文学部, 1969年。
- 7) 村山七郎(井桁貞義・興水則子協力)『新スラヴ日本語辞典』ナウカ, 1985年。
- 8) この経緯については, 上村忠昌「ゴンザ研究入門」『鹿児島工業高等専門学校研究報告』31号, 1996年, に詳しく記されている。なお, 98年9月現在で, 会員は300名を越え, 会報も28号まで発行されている。そして98年8月には, 会員有志29名がサンクトペテルブルグへの調査旅行を実施している。
- 9) 村山七郎「日露接触初期の文献学的研究の序説・下」『産園問題』第12巻第6号, 1968年(『クリル諸島の文献学的研究』三一書房, 1987年所収)。および同「コメニウスの著作の最初の日本語訳」『教育と医学』第17巻第5号, 慶応通信, 1969年。
- 10) Klaus Schller: Comenius, 1973, S. 65.
- 11) Gerhard Michel: Schulbuch und Curriculum, Comenius im 18. Jahrhundert, 1973. S. 53.
- 12) 村山七郎, 前掲書『クリル諸島の文献学的研究』, 101ページ。および同, 前掲論文「権左(ボモルツェフ), ア・ボグダーノフ共著 簡略文法について」, 3ページ。
- 13) Gerhard Michel: Rezeption und Wirkung der Medientheorie des Comenius und seiner Schulbücher im 17. und 18. Jahrhundert. In: *Mitteilungsblatt* Nr. 23, Comenius forschungsstelle im Institut für Pädagogik der Ruhr-Universität Bochum, 1990, S. 46.
- 14) Reiko Sato: Das Neuer wachte Comeniusinteresse in Japan. In: Klaus Schaller (Hrsg.): *Zwanzig Jahre Comeniusforschung in Bochum*. St. Augustin, 1990.
- 15) 上村忠昌「ゴンザの鹿児島方言への訳し方——オルビス・ピクトゥス(世界図絵)の場合——」『鹿児島工業高等専門学校研究報告』32号, 1997年。
- 16) 南日本新聞, 1998年3月18日付けの記事による。
- 17) 江口泰生も, 先に紹介した『オルビス・ピクトゥス』の翻訳に寄せた解説の中で, ボグダーノフとゴンザの使用したコメニウスの原著を1662年ラテン語・ドイツ語対訳版と推察している。それを底本と見る根拠の一つは, 『世界図絵』の139章にある異文が両者に共通していることである。「但し1662

井ノ口：漂流民ゴンザによるコメニウスの翻訳

年版そのものかという点も必ずしも限定できない」と慎重に論じている。『図解感覚世界』鹿児島県立図書館、1998年、4ページ。

- 18) Kurt Pilz: Die Ausgaben des Orbis Sensualium Pictus, 1967, S. 54.
- 19) ゴンザファンクラブ会報「ゴンザ」第1号, 1994年9月, に紹介されている村山の私信による。
- 20) 井ノ口淳三, 前掲書, 第6章。初出は, 井ノ口淳三「コメニウスの教科書観」藤田輝夫編『コメニウスの教育思想』法律文化社, 1992年, 79ページ。
- 21) 藤田輝夫訳『開かれた言語の前庭』(私家版), 1991年。
- 22) ゴンザファンクラブ会報「ゴンザ」第12号, 1996年12月。初出は, 『国語学』68, 1967年3月。
- 23) 上村忠昌, 前掲「ゴンザの鹿児島方言への訳し方——オルビス・ピクトゥス(世界図絵)の場合——」, 71ページ。

本稿は, 1998年3月に鹿児島短期大学で行われたゴンザファンクラブの例会での報告に加筆修正したものである。加筆に際して上村忠昌教授から諸点にわたりご教示をいただいた。ここに記して感謝の意を表するものである。

1998年9月29日 受理